

## Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

<https://doi.org/10.15017/458567>

---

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2003, 博士 (芸術工学), 論文博士  
バージョン :  
権利関係 :

## 第2章 今後の課題

### 第1節 研究の深化

本研究は出産後の母親および父親に対して 36 か月まで縦断的な調査を行い、母親個人を取り巻く環境について、心理・社会的側面から検討したものである。一方、女性には、妊娠中に胎動を感じることに、出産、母乳の分泌、そして授乳を通して乳児とのスキンシップができることなどの身体的・生理的な側面があり、それが、「母親への発達」を遂げさせていく基本にあることはいままでの研究でもない。しかし、「母親への発達」はそうした力を元にしたとしても環境要因、特に、夫（父親）の在り方が影響すると考えられる。そうしたことから、物理的側面だけでなく、心理社会的な質的な面での母親を取り巻く環境作りはまだまだこれからの課題といえる。

縦断的調査の経過の中で、強い育児不安がある母親からの不安の訴えや質問に対して、育児相談に応じる必要性を感じた。育児相談することにより、研究の結果にバイアスが生じる可能性は否定できないものの必要だと考え行ってきた。その経過中に、「叩く」という行為から虐待のグレーゾーンに至ったと思われる母親が生じた。実際にどのような状況なのかがわからず、直接的に電話や面接で確認すべきか、地域の専門職に連絡すべきか迷った事例があり、調査の原則としての個人のプライバシーを厳守することと、人間の尊厳の保護との狭間を感じ、倫理上の配慮をどうすべきか葛藤することもあった。そして、調査を通して、母親に「乳幼児への虐待」が生起しないよう未然に予防する必要性を強く感じ、今後の研究課題としたいと考えた。

本研究では母親意識に関する質問項目は、乳児に対する愛着を主とした肯定的な意識と育児不安や困難感などの否定的な意識の両面を含むものとして構成し、調査した。その結果、肯定的な意識と否定的な意識との子育てにおける苦楽の両面が母親意識に反映することが明らかであった。しかしながら、母親意識の肯定的変化が健やかな「母親への発達」であるかどうか、実態も含め、今後さらに検討していく必要があると考える。

また、縦断的調査の対象数が次第に減少することにより脱落例の情報が欠けて

いくこともこの研究の限界といえる。今後も追跡して調査を継続していくことが必要と考える。

## 第2節 支援の有効性の検証

本研究では、出産後の母親意識の経時的変化をもとに、健やかな「母親への発達」に影響する父親・家族の要因について明らかにした。その結果は、「母親への発達」が健やかなものであるかどうかを見守り、それを促すための支援に生かしていけると思われる。すなわち、Ⅶ部で母親への支援に関する実践課題として挙げた、母親と父親との協力による子育てを推進すること、ハイリスク新生児の母親への子育て支援、乳幼児への虐待を未然に予防すること、そして、これらの公的・私的な支援活動について相互間の連携を含め、地域に根ざした育児支援のネットワークシステム化を具現化していくのが、これからの課題といえよう。また、支援の有効性についての検証も必要と考える。